

## 国語 (B日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、一部省略した部分があります。)

アメリカの有名な古生物学者、ステイヴン・ジェイ・グールド(1941-2002)は、大学の講義を教室の一番前で聴くような、熱心な学生だった。その後、大学の教員になると、大きな手振りを交えて熱弁を振るう、熱い先生になった。学生時代にグールドの講義を聴講した生物学者、ジョン・B・ロソスは、内容も魅力的で素晴らしいと言っている。

ただし、かつてグールドの講義助手を務めた古生物学者、ニール・シュービンによれば、<sup>1</sup>(当然のことだが)その情熱をすべての学生が受け止めたわけではない。教室の前のほうで熱心に聴く学生もいたけれど、後ろのほうで眠りこける学生もいたようだ。もつとも、グールドの講義は人気があつて、学生が600人ぐらいいたらしいので、それも仕方がないだろう。大教室で講義をすれば、かならず何人かの学生は眠るものである。

さて、グールドはある講義で、「もしも白亜紀末に小惑星が地球に衝突しなかったら?」という質問を学生たちに投げかけた。小惑星が地球に衝突しなかったら、多くの恐竜が絶滅することなく生き残り、哺乳類が繁栄することはなかったかもしれない。ということは、現在、私たちヒトは存在していなかったかもしれない。グールドは、そんな可能性を指摘したのだ。

また、グールドは、著書『ワンダフル・ライフ』の中で、カンブリア紀(約5億3900万年前-約4億8500万年前)に生きていたピカイアという脊索動物について述べている。

グールドが『ワンダフル・ライフ』を書いたころは、ピカイアが私たちの遠い祖先だったかもしれないと考えられていたからだ(その後、ピカイアよりも古い脊椎動物の化石が発見されたことにより、ピカイアが私たちの祖先である可能性は、ほぼなくなった。しかし、それは、本稿で述べるグールドの議論の本筋に影響することはない。ちなみに、脊索動物は脊索動物のなかのグループである)。

ピカイアは長さが5センチメートルほどの小さな動物だ。カンブリア紀の動物の中ではとくに目立った存在ではないし、化石もそれほど見つからないので、個体数もあまり多くはなかったと考えられる。

ということが言えるだろうか。

カンブリア紀にはさまざまな形をしたユニークな動物がたくさんいた。

B、そのほとんどは子孫を残すことなく絶滅し

てしまった。ピカイアだって絶滅しておかしくなかった。だが、ピカイアは生き残った。その結果として、現在の地球に私たちが存在しているのである。

しかし、ピカイアが生き残ったのは、たんなる偶然くうぜんかもしれない。もう一回、<sup>3</sup>生命の歴史というテープをリプレイしたら、ピカイアは子孫を残すことなく、絶滅したかもしれない。その場合、現在の地球には、私たちが存在しないことになる。グールドはそう述べたのである。

このようにグールドは、生命の進化における 4 を強調した。たまたま起きた出来事によって、進化の道筋は大きく変わってしまうと考えたわけだ。進化は予測不可能で、生命の歴史のテープを何回かリプレイすれば、そのたびに異なる世界に辿り着くだろうというのである。

もちろん、<sup>5</sup>グールドに反対する人もいる。その代表がイギリスの古生物学者、サイモン・コンウェイ・モリス（1951ー）だ。イルカは哺乳類である。サメは魚類である。中生代（約2億5200万年前ー約6600万年前）に生きていた魚竜は爬虫類である。これらの動物は、系統的にはまったく異なるにもかかわらず、別々に同じような紡錘形の体に進化した。このような現象を<sup>6</sup>収斂しゆんという。

イルカやサメや魚竜が紡錘形の体を進化させたのは偶然ではない。体の大きい動物が水中を素早く泳ぐためには、紡錘形の体が適しているのだろう。このような物理法則に生物が従わなければならないなら、どのような形に進化するかは決まってくるはずだ。収斂は珍しいものではない。それどころか、じつはありふれた現象である。コウモリは自ら超音波を出して、完全な暗黒下でも蛾などを捕まえることができる。この素晴らしい能力は反響定位はんきやうていと呼ばれるが、イルカでもこの能力が独立に進化している。また、モルミルス科の魚は、電気を使って周囲を見たり仲間とコミュニケーションを取ったりする。この素晴らしい能力も、ギユムノートルウス科の魚で独立に進化している。

このような超音波や電気を使う複雑な能力でも、収斂が起きているのだから、もつとシンプルな特徴なら、収斂が起きて当然である。事実、生物の特徴のなかで、他の生物とまったく収斂していないものなど、ほとんどないだろう。どんなにユニークに思える特徴であっても、たいてい他の生物でも進化しているものだ。

ところで、この収斂という現象は、自然が行った進化の実験といえる。違う場所で別々に進化することは、生命の歴史をリプレイすることと、本質的には同じだからだ。つまり、「<sup>7</sup>収斂がしょっちゅう起きている」という事実は、「生命の歴史をリプレイしても同じような結果になる」ということを、示していると考えられる。

おそらく、生物が取り得るデザインには限りがある。だから、生命の歴史のテープを何回リプレイしても、辿り着く世界はいつも似たようなものになる。そういう意味では、進化は予測可能である。それが、コンウェイ・モリスの考えだ。

（出典 更科功『世界一シンプルな進化論講義 生命・ヒト・生物ー進化をめぐる6つの問い』講談社による）

#### 問一

  A・Bに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- |   |       |        |
|---|-------|--------|
| ア | AⅡそして | BⅡだから  |
| イ | AⅡたとえ | BⅡだから  |
| ウ | AⅡもしも | BⅡしかし  |
| エ | AⅡしかし | BⅡつまり  |
| オ | AⅡそして | BⅡなぜなら |



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

乾いた土ぼこりが立つ中学校のグラウンド。見るたびにどこかしさを感じて、朝佳は **A** をそらせなくなる。給食が終わりお昼休みの時刻、教室にはゆるい空気がカレーの残り香がたどっている。窓際の席の朝佳は、校舎下をじっと見つめた。はやばやと食べ終わった男子生徒数名が、サッカーボールを足で転がしながら、土を蹴ってゆく姿が見えた。休部前の部活でのあれこれが、もうずいぶん遠い昔のように思える。

「朝佳、あーさかー！」  
突然セーラー服の肩をつつかれて、飛び上がった。驚いて振り返ると、そこには陸上部でいつも一緒に練習していた香川南美がいた。

「グラウンド、見てたの？」

「**刀** **入**に聞かれ、ぎくつとする。悪いことなんかしていないのに、なんだか後ろめたい。」

「そんなんじゃないよ」

とつさに浮かべたのはぎこちない作り笑いだつた。

「ふうん？——まあいいけど。ね、朝佳に今日はお願いがあるんだ」

「……なに？」

きよんとして聞き返す。南美の瞳が、なにかいたずらでもたくらんでいるかのように輝いた。

「ね、朝佳、そろそろ陸上部に復帰しない？もう歩けるんだから、マネージャーやってくれたら嬉しいな。朝佳がいないと、みんな盛り上がりなくなってしまうよ。こっちは頼りにしてるんだから、ね、お願い。今日の放課後、とりあえずグラウンド来よう」

南美は顔の前で両手を合わせ、茶目つ気たっぷりに首を傾げてくる。朝佳は申しわけなく思った。復帰する元気がないだけでなく、南美の明るいノリについていけない状態でもない。

朝佳はかばんから手帳を取り出すと、今月のスケジュールを開いて「ごめん」と告げた。

「今日はもう予定が入ってる」

「じゃあ、明日は？ 明後日でもいいよ」

「……」

黙ってしまった朝佳に、南美の目から期待の光が消えた。 **B** した様子がかげえる。

「朝佳、怪我のことは残念だけど、いいかげん復活してね。私たち、本当に朝佳のこと待ってるんだから」  
朝佳は「ごめんね」ともう一度頭を下げる。

今日はハンカチを返してもらうため、柚葉と約束をしているのだった。先約があるというのは、嘘ではない。けれど、南美が陸上部復帰の橋渡しをしようとしてくれるのは、今日が初めてではなかった。だから、なおのこと心苦しい。

怪我をしてから、自分の本心を周りに——とくに南美には言えなくなってしまった。以前の自分は、もっとあっけらかんとしていたと朝佳は感じる。少なくとも、思っている言葉と表に出す言葉に、ズレは感じなかった。

背を向けて机から離れていく南美を見送った。教室の喧噪が、どこか遠い。

校舎を出ると、朝佳はいったん自宅に戻り私服に着替えた。そのまま柚葉との待ち合わせ場所である、緑地公園へと向かう。この小さな公園は朝佳の家からほど近く、また同じ中学校校区にある柚葉のアパートからも行きやすいようだった。

はやる気持ちを抑えて公園まで来ると、ベンチに座る柚葉の姿を見つけた。

「ごめん、ギリギリ！」

「ぜんぜん大丈夫。私が早すぎたんだ。——ここ、椿がいっぱい咲くんだよね。いまは季節じゃないけど」

柚葉が公園を見回しそう言うので、朝佳も微笑んだ。

「そうそう！ 私も家族と見に来たことあったなあ」  
共通の話題に、思わず和む。柚葉が「忘れないうちに」と、かばんからハンカチを取り出す。四つ折りのハンカチはしわひとつなく、フローラル系の良い香りがした。

柚葉がおおずと口を開く。

「アイロン、うまくかかってる？」

朝佳は、その言葉にびっくりした。

「もしかして、アイロン自分でかけたの？ 私なんかお母さんが、制服も普段着もやってくれるからまかせつきり。偉いよね」  
「いや、アイロンなんか。ぜんぜん偉くないよ。だって……」

「ずつと中学、休んでるから。——だから、偉いとか、そういうのは、ない」

驚いたけど、同時に納得もできた。それで、同じ学校の生徒だったのに、柚葉の顔に見覚えがなかったのだ。表情に影が差してしまった柚葉の気持ちを察し、朝佳は話題を変えた。

「でも、物語が書けるのは、正直すごくない？ どうやって、書けるようになったの？」

「昔から空想が好きで。いつもノートに何かしら物語を書いていたの。最初は遊びだったんだけど、すごく熱中しちゃって。物語を書いているときに、救われる時間なんだ」

「ぼつぼつと話す柚葉の声を聞きながら、朝佳は澄み渡った空を見上げた。  
「救われる時間があるって、いいね。私は、いま宙ぶらりん」

「宙ぶらりんって？」  
なにげなく聞こえるように言ったのに、間髪いれず聞き返されたので朝佳は戸惑った。柚葉の黒々とした二つの瞳が、こちらを真面目に見つめてくる。

「陸上が大好きで、大会で良い成績出したくて、ずつとがんばっていたの。でも怪我して休部中なんだ。そしたら元気が出なくなっちゃって、毎日楽しいことがない」

「そうだったんだ。大変、だったね。でもがんばっていたことも、きつと無駄じゃないよ」  
柚葉の言葉を選んだ気遣いに、朝佳の心がじわりと温もる。それで、つい付け足した。

「いまの救いは、晋ちゃんに教えてもらったラジオかな。はまっちゃいそうだし。あ、晋ちゃんって、金沢のラジオ局で働いている私のいとこ。やー、ラジオ、いいよね！」

そのとたん、柚葉が「わ、私もラジオ好き。それで、あの、その」と **D** し始めた。  
「こないだ会ったときから思ってたこと、言ってもいい？ ——朝佳ちゃんの声、とてもいいよね。聴いてて心地良くなる声だよ」

「へっ？」

思いもよらないことを告げられて、朝佳は目を丸くした。自分が、いい声してる？  
柚葉の口調に熱がこもっていく。

「そういうの、言われたことない？ 正直、ラジオのパーソナリティとか、やってほしいくらい。朝佳ちゃんの声は、ちょっと低めでしょう。たとえば横山花さんに似てると思う」

柚葉は、朝佳でも知っているドラマ俳優の名前を挙げた。  
「え、そう、なんだかそれ、嬉しいな。へへ」

手放しの褒め言葉に、思わず頬がゆるんでしまった。怪我をしてからずつと傷ついていた心が、タオルケットに優しくくるまれたかのような。この日は時間を忘れて、朝佳は柚葉と話し込んでしまったのだった。

(出典 上田聡子『あの子の隣で待つ春は』文研出版による)

注 喧噪：そうぞうしく、うるさいこと。

問一  A・Cに入る体の部位として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 目                      イ 首                      ウ 鼻                      エ 腹                      オ 口                      カ 手

問二  線  刀  入  の  に漢字を一字ずつ書き入れて、「前置きや遠回りなことをせずに要点に入る」という意味の四字熟語を完成させなさい。

## 問三

B・Dに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア BⅡすつきり DⅡうとうと  
 イ BⅡがっかり DⅡもじもじ  
 ウ BⅡいらいら DⅡはらはら  
 エ BⅡそわそわ DⅡしくしく  
 オ BⅡわくわく DⅡどきどき

## 問四

線1「申しわけなく思った」とありますが、何に対してそう思ったのですか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 南美が何度も誘ってくれるが、そもそも陸上を好きになれないということ。  
 イ 南美が何度も誘ってくれるが、その南美の元気さについていけないこと。  
 ウ 南美が何度も誘ってくれるが、南美が本心で言っているのかわからないこと。  
 エ 南美が何度も誘ってくれるが、南美に対してうそをついてしまったこと。  
 オ 南美が何度も誘ってくれるが、陸上部に復帰する気力がわかないこと。  
 カ 南美が何度も誘ってくれるが、その南美に内心腹が立っていること。

## 問五

線2「今日はもう予定が入ってる」とありますが、予定の内容が説明された一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問六 線3「その言葉にびっくりした」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ学校に通っている柚葉がずっと休んでいることを知り、驚いたから。  
 イ 柚葉が緑地公園に咲く椿の花の美しさを知っていたことに驚いたから。  
 ウ 貸したハンカチを柚葉が忘れずに持ってきてくれたことに驚いたから。  
 エ 自分ではないアイロンがけを柚葉がしていることを知り、驚いたから。  
 オ 柚葉がありがとも言わずにハンカチを渡してきたことに驚いたから。

## 問七

問七 線4「思わず頬がゆるんでしまった」とありますが、このときの朝佳の気持ちを四十五字以内で説明しなさい。

問八 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 朝佳は、いとこの晋ちゃんからすすめられ、将来ラジオのパーソナリティになるために励んでいる。  
 イ 朝佳は、同じ中学校に通っているのに、今まで柚葉と仲良くしてこなかったことを後悔している。  
 ウ 朝佳は、今は絶交してしまった南美と、いつかはまた笑い合える仲になれるだろうと信じている。  
 エ 朝佳は、柚葉には熱中できるものがあり、救われる時間があることをうらやましく思っている。  
 オ 朝佳は、柚葉との待ち合わせ場所を間違えて、遅刻してしまったことを申し訳なく思っている。

☐ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の線の部分のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 雨上がりに試合はサイカイされた。
- ② 湖に氷がハっていた。
- ③ 出かけるスンゼンに忘れ物に気づいた。
- ④ 太陽が水面をテラしている。
- ⑤ テンコウにめぐまれた。

問二 次の線の部分の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 新しい機械の操作がわからない。
- ② 雨水が垂れている。
- ③ 小型のドローンが飛んでいる。
- ④ 裏庭に小さな花がさいた。
- ⑤ 古い家屋が建ち並んでいる。

